

第6部

1. 真理の探究を前進させるために

理性的魂の存在を確信したデカルトは、自分の研究成果を公表することの是非に悩みながらも、公表の意味を追求せざるをえませんでした。そして、その過程で浮かび上がってきたのが、自分の後に続くであろう人たちが真理の探究をさらに前進させるために必要なことは何か、という命題でした。

この命題に対する自分の考えを示す中で、デカルトは、人間と宗教と自然との間における自分の立ち位置を、図らずも表出させることとなります。そして圧巻は、当時の論理学者たちのデカルト批判の一つ「循環論法との決め付け」を打破する、現代で呼ぶところの「仮説・検証思考」を提示していることです。方法序説第6部の流れを追って、こうしたことを見ていこうと思います。

自分の論文や意見を公表することに関して、デカルトに大きな影響を与えた事件がありました。それは1633年にローマ法王庁宗教裁判所で、ガリレイの「天文対話」がコペルニクスの地動説を採るとして否認されたことでした。

デカルトによれば、ローマ法王庁の人々は、彼が敬服する方々であり、しかも彼自身の理性が彼の思想に及ぼす権威に劣らぬほどの権威を、彼の行動に及ぼす方々なのです。彼は宗教戦争では旧教軍に従軍しており、旧教軍の冬営地の炉部屋での思索が、彼の思想と哲学の基盤を作ったとも言えますから、こうした彼の受け止め方には頷けるものがあります。

デカルト自身、ガリレイと同じ意見だというつもりはなかったのですが、自分の考えや行動に対して明らかにしておきたいと思うことがありました。それは、

敬服する方々の検閲が出るまでは、ガリレイの意見の中に、宗教に対しても国家に対しても有害だと想像されそうな点を自分は少しも見出せなかった、ということでした。即ち、自分が理性によって納得したならば、その意見の内容を自分が書くのを妨げるような点は、何も認められなかったということです。

そしてさらに、きわめて確かな論証を持たない限り決して新しい意見を信用しないように、また、人の不利益になりそうな意見は決して書かないように、細心の注意を払ってきた自分でも、このような事件があると、それでもやはり自分の意見の中に何か思い違いがありはしなかったかと心配になった、ということでした。

自分の意見を公表しようというデカルトの決意はたいへん強固なものでしたが、こうしたデカルトの決意をひるがえさせるには、これだけで充分でした。もともとデカルトは本を出すという職業が嫌いでしたから、それを断る口実として、彼は格好の理由を手に入れたとも言えます。

しかし彼は、こうした理由をはっきりと述べておきたいと考えました。そればかりでなく、一般の人たちも恐らくこれを知りたいと思うだろうとも考えました。そして、彼は、このことに関して語り続けるのです。

自分が、自分の精神から出たものを重く見たことは一度もない、と彼は断言します。即ち、自分が用いる方法で成果を収めたことが、理論的学問分野のある難問について満足を得たとか、この方法の教える論拠によって自分の生き方を律しようとしたこと以外には何の成果ももたらしていなかった間は、この方法について何かを書かねばならないと思うことはなかったという訳です。

自分の思索が大いに自分の気に入ったとしても、他人もまた恐らく、それ以上に気に入った自分なりの思索を持っていると、彼は考えました。しかし、自然学に関して幾つかの一般的知見を獲得し、それらを様々な光学の問題に試し始める中で、これらの知見が自分たちを何処まで導き得るか、また、今まで一般に用いられてきた諸原理とどんなに異なっているかに気付いた彼は、あることに思い至ったのです。

それは、これらを隠しておくことは、「力の及ぶ限り万人の一般的幸福を図るべし」という掟に照らして、大きな罪を犯すことになるだろうということでした。その論拠となる考え方はつぎのようなものでした。

私たちは人生にきわめて有用な知識に到達することができます。学校で教えているような思弁哲学の代りに、実践的な哲学を見出すこともできます。この実践的な哲学によって、火、水、空気、星、天空その他、私たちを取り巻く全ての物体の力や作用を、職人の様々な技能を知るようにはっきりと知って、それらの物体をそれぞれ適切な用途に用いることができます。即ち、実践的な哲学はこのようにして、私たちを言わば自然の主人にして所有者たらしめることができる、というものです。

このことは、単に大地の実りと地上のあらゆる便宜を、やすやすと享受させる無数の技術を発明するために望ましいだけでなく、主として、健康を維持するためにも望ましいという訳です。即ち、健康はまぎれもなくこの世で最上の善であり、他のあらゆる善の基礎であるとデカルトは考えていたのです。

精神さえも体質と身体器官の状態とに多分に依存しているため、人間たちを共通に今までよりもいっそう賢明で有能にする何らかの手段を見出すことが可能だとすれば、その手段は医学の中にこそ求めるべきだとデカルトは信じていました。

当時行われていた医学には、それほど効用の著しいものはほとんど含まれていませんでしたが、デカルトには医学を軽蔑する意図は少しもなく、医学に対してある種の確信さえ持っていたようです。

即ち、これまでの医学で知られている全てのことは、今後を知るべく残されているものに比べたら、無に等しいと誰もが認めており、医学を職業としている人たちさえも認めていると彼は断言しています。

デカルトは、身体および精神の無数の病気、そして恐らくは老衰さえも、私たちがその原因を知り、自然が提供してくれる医薬全てについて十分な知識を持つならば、免れることができると信じていました。彼は、これほどに重要不可欠な学問の探究に全生涯を当てようと企てたのでした。

ところが、自分が進もうとした道が、人生の短さと実験の不足とによって妨げられていることに彼は気付きました。この障害さえ無ければ、その道をたどって間違いなくその学問が発見されるはずだと信じていたデカルトは、この二つの障害を克服する上で、次のことが最善の策だと判断したのでした。

それは、自分の発見したことがどんなにささやかでも、全てを忠実に公衆に伝え、優れた精神の持ち主がさらに先に進むように促すことです。そしてその際、各自がその性向と能力に従い、必要な実験に協力し、知り得た全てを公衆に伝えることです。

また、このようにして先の者が到達した地点から後の者が始め、多くの人たちの生涯と業績を統合して、私たち全体で、各人が別々になし得るよりもはるかに遠くまで進むことができるようにすることです。

知識が進めば進むほど、実験が必要になることをデカルトは認識していました。彼は結果から先に見て、そこから原因に達していくのがよいと考えており、そのための最高の手段が実験だと考えたのです。

前進するに当たってデカルトが守ってきた手順とは次のようなものでした。

- ・この世界に存在する、あるいは存在し得る全ての事物の原理または第一原因を、全般に見い出そうと努める。これに当たっては、世界を創造した神のみを考慮し、私たちの魂に自然に具わっている、ある種の真理の種子と言えものからのみ、それらの原理を

引き出す。

- ・その後で、これらの原理から演繹できる第一の結果、最も当り前の結果は何であるかを検討する。

ここまでの段階でデカルトは、天空、天体、地球を見出し、さらに地球の上に水、空気、火、鉱物および、全てのうちで一番普通で、一番単純で、従って一番認識しやすい幾らかのものを見出したと考えました。

次に、こうしたものに基づいて、もっと特殊なものに降りていこうとした時、彼の前には実に多種多様なものがあったのです。その中には、現に地上に存在している物体だけではなく、もし神が望めば地上に存在することのあり得た無限に多くのものもありました。

こうした非現実の、無限に多くのものから、現実に存在するものの形相や形質を区別することは人間の精神には不可能ではないかと思われたほどです。ましてやそういうものを利用できるようにすることなど、それ以上に困難に感じられました。

こうした状態に対しては、結果から先に見てそこから原因に達していくようにし、多くの特殊な実験を利用するのでなければ、解決は不可能だと彼は語っています。

デカルトの精神は、自分の感覚に現れたことがある対象の全てにも検討を加えました。その結果として彼が断言したことは、自分が先に見出した原理によって充分にうまく説明できないものは一つもなかった、ということです。

同時に彼が認めたことは、自然の力は豊富かつ広大であり、この原理は単純かつ一般的であるゆえに、特殊な結果はほとんど全て、多くの違ったやり方でこの原理から演繹できると覚ったことでした。

こうした状況下にあって、彼が感じていた一番大きな困難は、このような特殊な結果は、この原理から演繹するのに、多数のやり方のうちのどれに依存しているのかを見出すことにありました。

この困難を克服するための解決策として、デカルトは実験を捉えていました。それぞれ違った結果を生み出す多くの実験をすることで、彼が求めるものを見出すことができると考えたのです。そして、自分は今、そのために役立ちそうな大部分の実験を行うのに、どんな角度から手を付けるべきかが十分にわかる地点まで来たと思っていました。

また同時に、それらの実験はあまりに多く手数もかかるので、それを全部成し遂げるには

自分の行動や資金だけではとうてい足りないことも彼にはわかっていました。そこから出てくる結論は、自分が自然の認識において深く進めるか否かは、今後実験を行える便宜が多いか少ないかに掛っている、ということでした。

以上のようなことが、デカルトが先に書いた論文の中で人々に知らせたいと望んだことでした。そして、そこから公衆が得ることのできる利益を明瞭に示したかったのです。こうしたことを人間の幸福を願う全ての人々に理解してもらい、彼らが既に成し遂げている実験を自分に伝えてもらうとともに、成すべく残されている実験の探求において自分を助けてもらおうと期待したのです。

ところが丁度同じ頃に、色々な理由からデカルトは考えを変えていくのです。それは次のような考えでした。

- ・多少とも重要だと判断する全てのことを、その真理の発見に応じて書き続けよう。
しかも、それを印刷しようとする場合と同じくらいの周到な注意をもって書き続けよう。
こうしたことが本当に必要なのだ。

デカルトのこの考えの裏には二つの理由がありました。その一つは、こうしたことを十分に検討する機会を多く持つためでした。多くの人たちに見られるに違いないと思うものは、自分のためだけに書きとめておくものよりも、いっそう丹念に見るからです。また、考え始めた時には真実だと思われたことが、紙に書こうとする時には虚偽に見えることもしばしば経験したからです。

もう一つの理由は、できることなら公衆の役に立つどんな機会をも失わないようにしたいと考え、自分の書いたものがいくらかでも価値を持つなら、自分の死後にそれを手にする人たちが、一番相応しいやり方でそれを活用できるようにしようと思ったからです。

デカルトはこのように考えながらも、自分の生存中にそれが公表されることには一切同意してはならないと思っていました。自分の書いたものは恐らく反駁や論争を免れないだろうし、それが自分にもたらす名声がどんなものであっても、そうしたことが、自分を導くために使おうと予定している時間を失う切っ掛けになることを避けたかったからです。

ちょっと我儘な感じもしますが、やらなければならないと感じることが、彼にはそれほどたくさんあったのです。少々言い訳がましく、彼は理由を語り続けます。

彼は、人間は誰でも、自分の力にかなう限り他人の幸福をはかる義務があり、誰の役にも立たないのは本来何の価値もないと主張します。しかしそれに続けて、私たちの配慮は現在よりもずっと先にまで及ぶべきであり、今生きている人々に何らかの利益をもたらす

かもしれないことでも、別のことでいっそう多くの利益を後世にもたらすことをする意図のある時には割愛してもよい、と言っています。

そして、これまでに彼が学んだわずかばかりのことは、自分の知らないことに比べればほとんど無に等しく、自分は未だ学び得るという希望を捨てていないからだ、とも言っています。

この時、デカルトはまだ41才であり、未だ十分な時間的余裕を持つことができると感じていましたが、それでも、残された時間を上手く使えるようにしたいとの希望が強かったのです。そして、さらに続けて彼は自信に溢れたことを語っています。

彼の自然学の基礎は、全てにわたってきわめて明証的で、理解しさえすれば直ちに真だと信じざるを得ないだろうし、一つとして論証できないと思われるものはないが、それでも、他の人たちの各種各様のあらゆる意見と一致するのは不可能であろうから、それらの諸反論によって、彼がたびたび仕事から心をそらされてしまうのは避けたい、というのです。

そうは言うものの、デカルトはこうした反論が有益であることは認めていました。それは、彼の誤りを知らせてくれるし、彼の主張に良い点があれば他の人たちも反論を通じてその理解を深めてくれる、ということでした。

そして、多数のほうが一人の人間だけよりも多くを見ることができますから、今からすぐに彼の自然学の基礎を利用し始めれば、他の人たちもそれぞれの発見によって自分を助けてくれることになる、ということでした。

デカルトは自分がきわめて誤りを犯しやすいことを認めており、最初に浮かんだ考えは決して信頼しないようにしていました。しかし、他の人から受ける反論については、それまでの経験から、その反論からはどんな利益も期待できないと悟っていたのです。

その根拠となったのは、ほとんど全ての場合、彼の主題からひどくかけ離れていたものは別として、人々の反論は彼が予見していたことだったということです。彼は、彼自身を超える批判者には一度も出会うことがなかったのです。

彼は討論の効用についても疑いを持っていました。即ち、学校で行われているような討論から、それまで知ることのなかった真理が発見されたことを見たことがないということです。このような討論では、人は相手を打ち負かそうと懸命になり、双方の論拠を考量するよりも、真実らしさを強調することに努力するというのがその理由のようです。

デカルトは、自分の思想を伝えることで他の人々が手にすると思われる利益も大したものではあり得ない、と言っています。というのは、自分はそれらの思想を未だそれほど深くは進めていないので、実地に応用する前になお多くのことを付け加える必要があると思っていたからです。そして、それをできる者は自分自身しかいない、と思っていました。

それは、彼を超える優れた精神の持ち主がいるはずがないということではなく、他者から学ぶ場合には、自分自身で発見する場合ほど明確に物事を捉えることができず、またそれを自分のものとすることができないと考えていたからです。

この考えは、彼が自分の見解の幾つかを非常に優れた精神の持ち主に説明した経験から生まれたものです。そしてさらに、古代ギリシャの、その時代で最も優れた精神の持ち主であった哲学者たちの思想も、正しく伝えられてこなかったと判断できる部分が多いことも、この考えを持つにいたった理由となったようです。

自分の力で真理の認識を追おうとする人たちに対して、デカルトはこの所論（方法序説のこと）以上のことを言う必要はないと考えていました。なぜなら、もし彼らにデカルトが成した以上のことをする能力があるとするれば、デカルトが見い出したと思っているもの全てを自力で見い出す能力も兼ね備えていると言えるからです。

これから発見すべきものとしてデカルトに残されていることに関して、彼らがそれをデカルトから教わるのでは、自力で学ぶよりも楽しみがずっと少なくなるだろうとデカルトは考えていました。

そしてさらに、彼らが最初は容易なことから探究し始めて、少しずつ段階を経て他のもっと困難な事柄に移っていくことによって得られる習慣は、デカルトの教示すべてよりも彼らの役に立つだろうと考えていました。

デカルト自身も自分のたどってきた道を振り返って、次のように語っています。自分で探究した全ての真理を他者から教えられ、それを知るのに何の苦労もしなかったとしたら、それ以外の真理を知ることはできなかつただろうし、真理の探究に専心することを通して獲得した、新しい真理を見い出す習慣と能力を得ることは決してなかつただろうと。要するに、他のどんな人が取り組んでも、それを始めた当人ほどにはうまく完成されない、というような仕事がこの世にあるとすれば、それこそデカルト自身がいま苦勞している仕事だと言っているのです。

デカルトは、この仕事に役立つ実験の全てを自分一人でやるのでは足りないことを理解していました。しかし、他人の手は自分の手ほど役に立つことはないだろうとも思っていました。

そして同時に考えていたことは、もし、あり得る限り最も偉大で、最も公衆に役立つことを見出す力量が間違いなくあると思われる人がこの世にいるとして、そのために他の人たちがあらゆる手段で彼の計画がやり遂げられるよう援助するとするならば、彼のためになし得ることは、必要とする実験の費用を提供し、さらに彼の自由な時間が誰にも邪魔されず奪われないよう防いでやること以外には無いであろう、ということでした。

以上のようなことを考え合わせ、考え抜いた上で、デカルトは手元にあった論文を決して公表するまいと思ひ、自分の生存中は、一般的な論文も、自分の自然学の基礎を理解できる基になるような論文も、世間に知らせまいと決心したのでした。

しかし彼は、この問題でその後も悩むことになります。公表を取り止めたことで、自分の行動を隠そうとしている、人に知られないようにむやみに用心している、といった悪評が立つのを避けたいと思ったのが一つの理由です。

そしてもう一つの理由は、自分の計画にどのように寄与できるかを、後進の人たちに理解させることを彼が怠らなければ、彼が成し遂げるよりもはるかに多くのことを、彼らに残すことができたろう、という非難も回避したかったことです。

そこで彼は、特殊題材に関する試論を書き、彼の行動と計画について公衆に対して報告をすることにしました。その題材として彼は、あまり論争の種にならず、彼の原理について自分が望む以上に言明させられることにもならず、しかも諸学問で彼のできることを、できないことを十分に明晰に示すようなものを検討しました。その結果選ばれたのは、後に三試論として知られる、「屈折光学」「気象学」「幾何学」の三つでした。

「屈折光学」と「気象学」の冒頭には画期的な事柄が述べられています。少々難解なところがあり、読んでいる者に不快感を与えるかもしれませんが、忍耐力をもって全体を深く読み通せば、その主張に満足してもらえらるだろうとデカルトは言明しています。それは、後のものがその原因である初めのものによって論証され、初めのものはその結果である後のものによって逆に論証される、といった具合の論拠のつながりを持つからです。

これを論理学者モランが循環論法だと批判しました。それに対して、デカルトは次のように答えています。

「あなたはまた、ある原因によって結果を証明し、ついでその原因を同じ結果によって証明するのは、論理の循環だとおっしゃるが、それは認めます。しかし、だからといってある原因によって結果を説明し、ついでその原因を結果によって証明するのが論理の循環であるとは、わたしは認めません。“証明する”と“説明する”とでは大きな差異がある

からです。……」

原因（仮説）によって結果（事実）を説明し、次に、その原因を結果によって証明することは循環ではない、とデカルトは主張しているのです。即ち、実験がこれらの結果のほうの大部分を確実なものとしている一方、そうした結果が演繹される原因のほうは、結果を説明するには役立っても、証明するにはあまり役立たないと言えるからです。それどころか反対に、原因のほうこそ結果によって証明されるのです。そしてデカルトはそういった類の諸原因を“仮説”と名付けました。

デカルトがこうしたことを主張したのには、ある理由がありました。それらの仮説は前の章で説明した第一原理から演繹できると、彼は考えていましたが、こうした場面で敢えて演繹をしないことを伝えたかったのです。この理由は次のようなことでした。

ある種の精神の持ち主は、他人が20年もかかって考えたこと全てを、二つ三つの言葉を聞くだけで、一日で分かると思ひ込み、しかも頭がよく機敏であればあるほど誤りやすく、真理を捉える力も劣るようです。そんな彼らが、デカルトの原理だと思ひ込んでいることを基礎にして、途方もない哲学を打ち立てる切っ掛けを与えたくなかったのです。

演繹思考を軸にして哲学を語るデカルトが、敢えて演繹をせずに、実験を交えた仮説- 検証思考を全面に押し出しているのは注目に値することです。

方法序説の結びには、次のようなデカルトの心情が語られています。

デカルトは、自分が生きるために残っている時間を、自然についての一定の知識を得ようと努める以外には使うまいと決心しました。その知識は、そこから医学のための諸規則を引き出すことができるようなもので、それらの規則は当時の人々が持っていた規則よりも確かなものだと、彼は考えていました。

彼は生来、これ以外のあらゆる種類の計画（軍事技術の研究など）を、極力避けていました。また、何かのきっかけでやむを得ずそれをやることになっても、うまくやり遂げる力があるとは思っていませんでした。こうしたことについて宣言したとしても、自分を世の中で偉く見せる役には立たないことを彼は解っていましたし、偉くなりたいとは少しも思っていませんでした。

そしてさらに、この世で最も名誉ある職務を与えてくれる人々よりも、その好意によって何の支障もなく自分の自由な時間を享受させてくれる人々に、よりいっそう深い感謝の気持を持つだろうと感じていたのです。